

進路指導部会 提案資料

研究主題

自分の適性に合った進路決定のあり方 ～個別学習,合理的配慮の活用を通して～



## 1 研究主題

自分の適性に合った進路決定のあり方 ～個別学習,合理的配慮の活用を通して～

## 2 主題設定の理由

文部科学省の「キャリア教育の手引き」より,キャリアとは「人が,生涯の中で様々な役割を果たす過程で,自らの役割の価値や自分と役割との関係を見だしていく連なりや積み重ね」と書かれている。また,子どもたちが成長する過程でのキャリア発達とは「自己の知的,身体的,情緒的,社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程」と書かれている。具体的には,社会の中で自分の役割を果たしながら,自分らしい生き方を実現していくことがキャリア発達の過程ととらえられている。キャリア教育に求められる能力は「基礎的・汎用的能力」とされ,大きく分けると下記の4つの能力になる。

基礎的・汎用的能力	
1	人間関係形成・社会形成能力
2	自己理解・自己管理能力
3	課題対応能力
4	キャリアプランニング能力

これらの能力について,答申では「児童(生徒)が,基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め,学習内容を確実に身に付けることができるよう,児童(生徒)や学校の実態に応じ,個別学習やグループ別学習,繰り返し学習,学習内容の習熟の程度に応じた学習,児童(生徒)の興味・関心等に応じた課題学習,補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや,教師間の協力による指導体制を確保することなど,指導方法や指導体制の工夫改善により,個に応じた指導の充実を図ること。」と述べている。本塾中の実態を踏まえ,この求められる能力を身につけるためには,個々の特性を十分に配慮し,なおかつ個別に丁寧に対応することで基礎的な知識や技能が定着し,自己理解がすすんで自己肯定感が向上し,自らの未来は可能性に満ちているという意識を根底にもつことができ,よりよい進路選択,決定ができるのではと考え,この主題を設定した。

## 3 本校の特色

本校は印西市にある中学校である。生徒数が年々減少しており,令和5年度に「小規模特任校」に指定された。この「小規模特任校」制度を利用し,今年度新1学年に11名の本塾学区外生徒が入学した。昨年度在籍がなかった新3学年には同じく本塾地区外から6名が転入し学年が新設された。2年生は10名で地区外からの生徒は内3名在籍し,全校27名からなる。学区外からの生徒には,何かしら配慮が必要な生徒が見受けられる。生徒それぞれの課題や特性を考慮して,安心して学校生活を過ごせる取組や対応を行っている。

## 本塾中小規模特任校としての取り組み

### ① 登校時刻の配慮

本校に在籍する生徒の半数は公共のバスや電車、または保護者の送迎を利用している。そのため、朝の登校時刻が定時に間に合わない生徒は配慮申請を行い、安心して登校できるようにしている。安全確認のため、配慮申請している生徒であっても、登校時刻に間に合わない場合は、学校に連絡を入れるよう取り決めている。

### ② 複数担任制の実施

各学級2名の担任を置いている。より多くの教師が生徒に関わることにより、生徒が安心して過ごせる環境と、より細かな指導ができるようにしている。

### ③ 標準服に移行

今年度からユニクロで市販されている製品を標準服として採用した。他の生徒との違いを感じながら本塾中で過ごすストレスをなくすことや、制服を新たに一式購入する金銭的負担の軽減になる。

### ④ 私服デーの実施

本校では、自分で考え、自分で決定する機会を増やすことに力を入れている。気温、動きやすさ、公共のマナーなど、様々な条件から最も適した服装を自ら決める経験が「自己決定」の訓練につながると考える。

### ⑤ 定期テストの廃止

定期テストを廃止し、各教科ごとに単元末テストを実施することで、評価をする機会を増やすことや学習範囲を狭くすることで生徒の学習意欲につなげる。また、毎日学習する習慣を身につけられるようにしている。

### ⑥ 個に応じた学習支援

TT指導や教科担任外が授業に入り、必要な生徒に支援する。また、個別学習を希望する生徒には、学習指導員や空きのある教員が別室で指導を行う。

## 4 昨年度3年生の実態

男子10名(2名情緒学級在籍生徒)でスタートした。小学校からは学力、情緒面で多くの支援が必要と申し送りがあった。入学してみると生活面での指導が必要な生徒ばかりだった。また、小学校高学年でコロナ禍と重なり、小学校での経験、集団生活経験が大変乏しく、集団行動が成り立たないことが多くあった。通常級8名の生徒の内、2名は小学校時に支援学級に在籍しており、他1名は小5で支援級在籍を経験していた。そのほかに支援が必要と思われる生徒が1名いた。1年次に支援級の生徒1名が転出し学級は9名の生徒になった。2年次に女子3名が転入し、3年次に女子1名が転入し、卒業時は13名(1名知的学級、1名情緒学級在籍)となった。

## 5 研究仮説

### 〈研究仮説1〉

キャリア教育において、個々の特性に合った学習環境、内容を精査することによって、基礎的・基本的な知識及び技能の習得や学習内容を確実に身に付けることができるであろう。

### 〈研究仮説2〉

キャリア教育において、合理的配慮を利用しながら、自己理解・自己管理能力を身につけることにより、より自分の適性に合った進路決定ができるであろう。

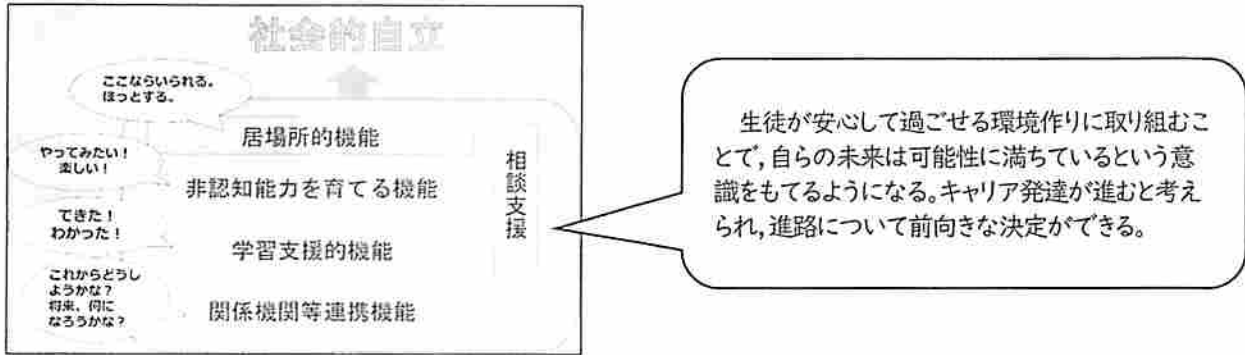


図7 センターがもつ機能

千葉県子どもと親のサポートセンター研究報告書 第22号引用

## 6 研究実践

### 実践I:生活能力の育成

#### (I) 生活能力を身につける支援

##### ・ 衣服の管理

通学バッグに衣服をしまえない生徒が多く、脱かごを用意して、脱いだ服をたたむ練習をした。

##### ・ 白衣の洗濯

家庭科の授業で洗濯実習を行い、生活能力のスキルとして金曜日に学級の白衣を洗濯して干した。

##### ・ 姿勢の保持

起立時の姿勢の保持、椅子に座った時の姿勢の保持、食事の取り方の指導を行った。1年次では合唱1曲を歌う間もまっすぐに立ってられない生徒が多かった。特別支援アドバイザーの指導によると、体幹が鍛えられておらず、体のどの筋肉を使えば良いかわからない生徒が多数いると指摘していただいた。アドバイザーの助言を元に、朝読書の時間に対象の生徒を別室で、自分の身体がどこまであるのかつま先や指先の位置を確認する空間認知を鍛える活動や脱力の仕方、眼球運動などの自立活動を行った。

##### ・ 食事指導

コロナ禍で人と向き合って食事を摂ることがほとんど無く、家庭生活と同じように食事をする生徒が数人いた。箸の持ち方、食事中立ち歩かないこと、茶碗を持って食べるなど社会に通用するマナーを根気強く指導し続けた。

## (2) 学習環境を整える

### ・ 授業準備

中学校になると各教科の用具が増え、そろえられない生徒が多数いた。そのため、教科ごとにチャック付きビニール袋を用意して教科ごとに道具を入れるようにした。授業準備が袋1つで済むようにして、授業に集中できるようにした。また、休み時間を十分に確保することができた。



### ・ 天板拡張板の使用

机の上に用具が散らかって筆記用具などをすぐに落とし、落ち着いて学習に取り組めない状態だった。天板拡張板をつけ、机の面積が広がることにより机上が整った。また、天板拡張板に落下防止のほどよい高さの壁があるので、物を落とすことがほとんど無くなった。生徒も教師からも好評で現在は全校生徒の机についている。



### ・ 授業内で配付されたプリント類は必ず貼る、ファイルに挟ませる指導を行う。

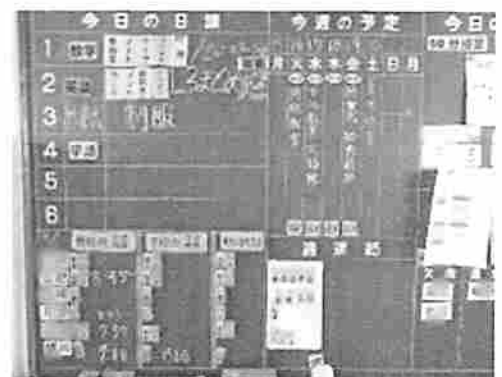
(生徒が貼るのを見届ける。)

### ・ 視覚に訴える掲示物の作成

聞くことが得意な生徒、見るのが得意な生徒と様々なので、大切なことは紙に書いて掲示した。

chromebook のクラスルームに投

稿して、家庭でも確認できるようにした。係活動など、誰が何をやるのか一目でわかるようなボードを作成し、欠席者がいた場合は誰がサポートするのも明確にして、混乱がないようにした。



## 実践2: 実態に応じた時間割・教員割り振りの対応

入学してすぐに支援が必要だと職員全体で共通理解をして、複数の教員が入れるように時間割を組み直した。学期途中であっても、必要に応じて主任会や生徒指導部会、教務主任と話し合いを重ねて変更していった。

### (1) 一斉授業での支援

#### ・ 複数教員で授業支援に入る。

聞くこと、書くことそれぞれに課題がある生徒の隣に座ったり、机間指導をして、一斉指導の教師の言葉をかみ砕いて説明したり、漢字のルビ振りをしたり、ローマ字読みを書いたりもした。プリントはどこの問題をやっているのか指でなぞったり、一緒に考えて答えを導いたりした。安定した支援ができるよう、同じ教員が同じ生徒を見るように心がけた。また、卒業後のことも考えていずれは支援を外していくことを保護者、本人と共通理解をして、学期ごとに支援態勢を考え直し、徐々に支援を減らし自立を促していった。

学級での教科ごとの支援態勢

教科	1年次	2年次	3年次1学期	3年次2,3学期
国語	教頭+学年主任	教科担当の要望で支援なし		
数学	TT	週2回教務主任	支援なし	
英語	学級担任など入れるときにはできるだけ教員をつけた。3~5名	学級担任など最大5名が担当生徒を決めて支援	学年主任,他1名で支援	教室支援なし。 2名別室授業。不登校の生徒も登校時に参加
理科	教頭+情緒学級担任	学級担任+情緒学級担任	入れるときは学級担任+情緒学級担任	支援なし
社会	支援なし	支援なし	4月後半に複数生徒より要望があり,入れるときは学級担任が支援	職員がつけず支援なし
保健 体育	支援なし	女子生徒が転入のため,女性職員1名	女性職員1名	
音楽	学年主任(伴奏)	学年主任+支援員		
美術	学級担任など入れる時に支援	教務主任	支援なし	
技術	教頭	教頭+教務主任	教頭	
家庭	教頭	教頭	支援員	
道徳	学年主任	情緒学級担任	情緒学級担任	
総合学活	学年主任+情緒学級担任			

(2) 別室での授業支援

- ・ 個別学習が必要と思われる生徒は保護者に支援ができる旨を伝え,希望があった場合に合理的配慮申請の手続きを踏んで対応した。教室の生徒と同じ評価をつけられるよう,教科担任と話し合ったり,一斉授業に支援に入っている教員からタイムリーに学習内容を伝えてもらったりした。ミニテストや発表時には授業に参加した。

個別支援に声をかけた生徒

生徒	教科	生徒の様子	対応方法
A	英語	聴覚過敏で読む,話すなどの活動に集中できない。	2年次9月途中から別室授業で学級担任が行った。静かな環境で集中して学習に取り組むことができた。
B	英語	3年5月に転入。不登校で2年後半は学習していなかった。一斉	転入時は別室登校。学習に意欲が出てきた時を見計らって,個別学習に誘う。生徒Aの別室学習と一緒に取り組んだ。

		授業に不安があり、安心した学習環境を希望。	
C	国語 英語	学習障害、識字障害の傾向。アルファベットが読めず、カタカナでルビを振る。漢字は小1程度。小学校5年のみ知的支援級在籍。	教育支援会議で毎回名前が挙がる生徒だが、家庭の理解が得られず、本人もかたくなに拒否。そのため、一斉授業のなかで受けられる支援を提示し、合理的配慮申請の手続きを踏んで支援を行った。
D	すべて	小学校時は知的支援級在籍。中学校は通常級で入学。	徐々に学習理解が難しくなり、2年1学期に支援級への転籍の話をした。1学期後半を「お試し期間」として支援級と通常級での学習ができるよう時間割を組み直した。2学期正式に転籍。
E	すべて	小学校時に情緒支援級在籍。トラブルがあり、小5で転校して通常学級籍。中学も通常級で入学。診断あり。	教育支援会議で毎回名前が挙がる生徒。保護者は転籍に理解を示したが本人はかたくなに拒否。そのため、一斉授業のなかで受けられる支援を提示し、合理的配慮申請の手続きを踏んで支援を行った。

実践3: 合理的配慮申請の手続きを行い、学校生活すべてにおいて安心して過ごせる場を設定した。

(1) 学習支援

- ・ 一斉授業で生徒の隣に座り支援をした。

- ・ 別室学習。

- ・ 課題の精選。

教科担任と話し合い、ワークの取り組む量や提出物を減らして負担を軽くした。

単語テストなどの達成ラインを生徒の習熟度に合わせて設定した。

- ・ 朝読書の時間を振り返りの時間として、小学校3年生までの漢字、中学校1年からの英単語のミニテストの実施。

- ・ 書くことが負担になる生徒への配慮。

タブレットに打ち込む。板書を画像として撮る。青色ペンの使用で、精神を落ち着かせたりリラックスさせたりして、集中力を高める。(保護者からの要望)

(2) 登校時間の配慮

- ・ 学区外の生徒は保護者の送迎で登校していた。自立を促すため、公共機関での登校を促した。そのため、公共機関で登校した時は遅刻扱いをしないようにした。努力目標であり、いずれは時刻に間に合うようにすることを保護者、本人と共通理解をした。

(3) 座席の配慮

- ・ 転校してきた生徒は前の学校で不登校であった。そのため安心して教室で過ごせるよう、座席の配慮を行った。



#### 実践4: 自己有用感,自己達成感を感じられる学級経営

##### (1) 転入生の受け入れ態勢の充実

- ・ 本学級に4名の転入生を受け入れた。どの生徒も前の学校では不登校を経験しており,すぐに教室に入れる状態ではなかった。そこで,主に学年主任が転入生と別室で過ごし,教室に入るプログラムと一緒に考えていった。はじめは学級の生徒への「おはよう」の挨拶からはじめ,参加できる教科から教室に入るなどを取り組んだ。最終的にはほぼ全員の生徒が教室で過ごせるようになった。

##### (2) 学級係を一人一役にする

- ・ 責任感をもたせることを目標に一人一役を任せた。係も生徒の特性に合わせたものを作り,「これならできる。」という仕事を当てた。欠席者の分は,誰かがカバーすることを当たり前させ,誰かのために役にたっていることを実感させるようにした。

##### (3) 当たり前のことを当たり前に行えるように

- ・ 合理的配慮を行ってはいるが,だから何でも良いのではなく,提出物を確実に出すことや清掃にしっかりと取り組むなどやるべきことは徹底してやり遂げる指導をした。やりきれた達成感を味わうとともに,自律させ,社会的自立を促す手立てとした。

##### (4) 3年間の総まとめ,「私の好きを紹介しよう」総合授業の発表

- ・ 公立高校入試が終わり,卒業式までの「学年日課」を利用して,総合の学習「私の好きを紹介しよう」というテーマを設定し,学習に取り組んだ。1授業50分,または25分にして自分で授業を組み立てた。「自分の得意・好きなこと」「クラスの皆が楽しめる内容」という課題を設け,発表した。発表後は自己評価と級友の発表の評価をアンケート方式で行った。「自分を堂々と表現すること」「友達の良さを認め,共有すること」が目的であり,これらが「キャリア教育」の総まとめと捉え,実践した。

#### 実践5: 個の特性に合わせた職場体験学習,進路指導

##### (1) 職場体験学習

- ・ 印西市では「生き生き体験学習」として体験事業所の一覧が各学校に配付されている。コロナ禍であったが,事業所によっては快く引き受けてくださり,2日間実施した。
- ・ 就きたい職業がはっきりしている生徒が半数いたので,本人の希望と特性に合わせた事業所を紹介した。
- ・ 自立と責任を学ぶ機会として,基本は1事業所につき1人にした。
- ・ 2日間の体験をパワーポイントにまとめ,それぞれ体験したこと,学んだことをについて発表会を行った。

##### (2) 進路指導

- ・ 学級全員が進学希望であった。どの学校に行くのかではなく,将来どういう大人になりたいのかをじっくりと考えさせ,その大人に近づくためにどのような進路選択をするのか,ということを考えさせた。
- ・ 進路学習では面接練習に時間をかけた。思いを文章に表すことに苦手意識が多い生徒がほとんどなので,生徒が発した言葉を紡いで文章に表し,志望理由を書き上げていった。文章に表すことができた生徒から面接練習を行い,生徒同士で評価しあった。



## 実践6: 外部との連携

### (1) S.Cとの全員面談実施

- ・特に生徒EはS.Cとの昼休み面談を3年間続け、情緒の安定を図った。S.Cに気になる生徒の様子を伝え、意見やアドバイスをいただいて生徒指導に生かした。

### (2) 特別支援アドバイザー

- ・7年前から特別支援アドバイザーの派遣を依頼し訪問を継続している。学期に2,3回訪問していただき、細かに指導を仰いだ。

### (3) 訪問相談員

- ・医療とつながっている生徒については、親子で訪問相談員との面談の機会をつくり、定期的に面談を行った。

## 7 成果と課題

### 【成果】

- ・身支度を調える、姿勢の保持、挨拶など、当たり前のことだが、生活経験や社会とのつながりが少なく、特性のある生徒にとって、「世の中のルールはこういうもの」と認識させたことにより行動に変化が見られた。身の回りが整頓され、落ち着いて学校生活を過ごせる時間が増えて、安心して授業に臨むことができた。
- ・実態に応じた時間割・教員割り振りの対応を行ったことにより、より個々の特性、ニーズに合った支援ができた。生徒は自分の成長を通して自己理解が進み、「安心して授業に参加できた。」「勉強がわかった。」「私はできるようになったから、この支援はいらないです。」などの発言が聞かれた。
- ・合理的配慮申請を申し出るといことは、自分の特性を認め理解することである。自己理解がすすみ、自分の得意、不得意を知り、より現実的で自分に合った進路選択をする手がかりとなった。ただし「特性」ばかりに目を向けすぎるのではなく、十分に自己肯定感、有用感を感じざる体験を積み、「自分の良さ」にも気づくことができた。
- ・合理的配慮申請を3年次は保護者からの申請に加えて本人から口頭で申し出ることにより、卒業後必要な場面で自ら申し出る練習になった。この経験を積むことが、ウェルビーイング（生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働きと潜在能力）につながり、キャリア発達「自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程」ができた。
- ・「自分の好きを紹介しよう」の取組では、どの生徒も「自分らしさ」を十分に表現した発表をすることができた。堂々と話す姿は、自己肯定感の高まりを感じることができた。また、評価でも、客観的に自分の授業を振り返ったり、友達の発表を評価したりすることができており、自分や友達の価値を十分理解していると感じられた。

### 発表例 生徒C:「ミニカーについて」

車好きで、休みの日には色々な店を自転車で回り、ミニカー収集をしている。自分はミニカーがいかに好きか、ミニカーの歴史、レアなミニカーなどを紹介した。「好き」とは自分の生活を豊かにしてくれることである。みんなにも「好き」なことや物を見つけて豊かな人生を過ごしてほしい。とまとめた。



#### 生徒D:「雑巾を縫おう」

2年次2学期に支援級に転籍し、自分の特性を生かして学習を進めた。作業学習で製作した布製のバッグを技術・家庭科作品展に出展し「県研究会長賞」を受賞した。全校から賞賛を得て大きな自信となった。授業では「僕の得意なミシンを使って、みんなに雑巾を縫ってもらおう授業をします。そしてその雑巾を奉仕作業に使い、学校をきれいにします。」と発表し、ミシン先生として皆に指導した。



#### 生徒F:「自分変えた映画の名言集」

転入時は人と目を合わせられず、別教室でコートのフードを被って過ごしていた。徐々に教室に入り、「自分を変えたい」と修学旅行実行委員長に立候補した。洋画が好きで「自分を変えた映画の名言集」というタイトルを掲げ、パワーポイントを使って発表した。「映画の名言が自分を支え、自分の背中を押してくれた。」と不登校だった時の心情や様子と言葉を重ねながら、自分の成長を発表した。



- ・ 個の特性に合わせた職場体験学習を行い、より明確に将来を見据えた進路選択につながった。
- ・ 外部との連携により、より専門的な理解や情報を得ることができ、通常学級で行う特別支援の方法や、個々の生徒の特性に沿ったアドバイスをいただいて、より適正な進路選択に導くことができた。
- ・ 昨年度卒業生は全員希望する進路決定をすることができた。転入した生徒は「これからもうまくいかないことがあるかもしれない。けれども、自分は立ち直る方法を知ることができた。またつまづくことがあっても立ち直ることができる。」と話していた。また、別の生徒は「自分がしてもらったように、何か困っている人がいたら今度は支える立場になりたい。」と話していた。

#### 【課題】

- ・ 教員1人あたりの持ち授業数は小規模校なので少ない。しかし、1学校として運営しているため、校務分掌、出張、行事なども限られた人員で行っている。その中で支援は教師の負担になる。
- ・ 個に応じた支援は、これ以上生徒が増えれば行き届かないと感じた。
- ・ 保護者、本人の意向と、学校との考えを共通理解することに難しいときがあった。
- ・ 学区が印西市内全域になり、登下校の時刻とバス電車の時刻が著しく合わないときがある。そのため、行事や学習補充のために放課後の時間を利用することが難しい。